

「マーケットの決読み・決読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◇◆◇ No.0873 ◇◆◇

26/01/07

【 経験則からは重要な1月相場、今年も要注意 】

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

昨年12月のドル/円相場は、月間変動が3.44円(154.34-157.78円)。なんと、最後の最後にきて年間を通して2025年の月間最小変動を記録した。ちなみにワースト2位は8月の4.46円で、12月はそれを1円以上も下回る。由々しき事態とも言えよう。

2019年には年明け早々の1月3日、「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの暴落があったことを記憶している方も多いと思われ、当時のような「1月大相場」を期待する声もあるにはある。しかし、巻き戻し期待の声よりも、ドル/円の変動が年間を通して落ち着いてしまったことを懸念する向きの方が優勢かもしれない。

◎昨年は「1月高値」が「年間高値」に、今年も同様の展開なるか

今回の当レターでは、月初恒例である経験則から見た「1月の月間見通し」をまずはレポートするが、最初に過去の1月相場の戦績を振り返ってみたい。1990年以降昨年まで過去36年間を振り返った場合、勝率は15勝21敗だった。

確率的には6割を若干欠ける数値で、物凄くドル安・円高方向が有利というわけではないが、実は近年は平均を大きく上回る8割近くが「円高」に振れている。実際、2014年以降という過去12年だけに限定すれば、ドル高・円安方向に振れたのは2016年と2021年、そして2024年の3回のみ。残りの9回はすべてドル安・円高に振れていた。覚えておいて、損はない経験則という気もしている。

そんな1月相場には、ほかにも幾つかの特徴があるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の3つだろう。ひとつずつ順を追って説明していく。

最初に取り上げるのは、「月間を通して値動きが両極端である」ことで、動く年はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない年はベタ屈状態が続くことも少なくない。前者の「よく動く1月相場」については、年明け早々の3日に、いわゆる「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの暴落を演じた2019年が思い起こされ、それもあってか同年は1月が年間でもっとも動いた月だった。さらにいえば、2017-19年の3年はすべて1月が年間でもっとも動いた月だったことが確認されている。

それに対して、「動かない」という年も実は決して少なくないのだが、ここ数年の1月相場は比較的大きめの動意が目に付く。ここでは、期待を込めて前月が「2025年の月間最小変動を記録」一一したことの反動を祈念しておきたい。

次に、一年12ヶ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は年明け早々の「1月に一年の底をつける」ケースが非常に多い。

事実、1990年以降昨年までの36年間で16回の「年間底」を記録していた。そして、改めて指摘するまでもなく、昨2025年もまさにそれ。1月10日に記録した高値158.88円が結局、昨年の年間最高値となつた。そのほか、比較的喫緊の事例だけを取り上げても、2016年と2017年は昨年同様1月に年間のドル最高値を示現しているほか、2013年と、2019年そして2021年から2023年までは3年連続で逆に1月安値が結局年間を通してドル最安値となっている。もちろん、毎年必ず起こる事象ということではないものの、非常に気になる経験則で、今年もやはり注意しておきたいところだろう。

たとえば、ドル/円がこのあと160円台に乗せる展開などがあったのち、当局の円買い介入で急落——などといった展開があったとすれば、記録した「160円台」は、年末振り返ってみると今年のドル最高値だったということになるのかもしれない。

そして最後3つの特徴は、「1月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」——ことになる。つまり、1月の月足が陽線であれば、その年一年間は年間を通してドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けとなるケースが多く確認されている。

ちなみに、こちらについても1990年以降昨年まで過去36年間の戦績を調べてみると23勝13敗。確率と

しては6割強で、昨年も「1月の月足陰線(ドル安・円高進行)」、「年間の年足陰線(ドル安・円高進行)」で上記した経験則に当てはまる。いずれにしろ、こちらも参考要因として、頭の片隅に留めておいて損はなさそうだ。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただけようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved

◆◆◆

EX-newsletter